原発は本性を剥き出し、過去、現在、未来を奪った

非核の火、福島で引継ぐ
宝鏡寺・早川住職に聞く

東日本大震災から10年目を迎えた今年の3月11日、福島県楢葉町の宝鏡寺に核兵器廃絶と原発ゼロへの思いを込めた「非核の火」が灯りました。上野の東照宮からこの地に「火」を移すとともに、「原発・悔恨伝言の碑」と「伝言館」を建設した宝鏡寺住職の早川篤雄さんにお話を聞きました。

福島の原発の問題で行動を始めたのはいつ頃からですか

1971年の3月26日に東京電力の第1原発1号機が営業運転を開始します。その同日、東京電力の広野火力発電所の誘致が発表されました。

それまでも第2原発の誘致が決議され、さすがに地元の人々も原発にもそれなりに不安を持っていたけれども、広野火力発電所が隣町に誘致されたことの方がピンと来ました。広野火力発電所ができるということになれば、これは四日市のような問題が起きるという不安です。それに加えて原発も果たして安全なのかという疑問があります。

そういう不安を持つ町民が住民組織を結成してやらなくてはいけないと、次の年の2月11日に町民の会を130人ほどで結成します。結成後すぐの学習講演会で原発も火発も今政府や電力会社がやっているような具合で行けば、公害は必ず起こると講師の先生が話しました。どうすればいいのですかと聞くと、「それは住民運動以外ありません」と言われました。ではそうしようと、次に政府や電力に対して我々住民が持っている疑問に答えるようなら公聴会をやってくれと署名運動を展開し、73年5月に公聴会を開催することになりました。

だしそれは原発だけでした。

これは要求通り公聴会が開かれることになったけれども、公聴会の要綱をよく見ると陳述希望者、傍聴人、運営すべて向こうが用意したもので、非民主的で、あとからやらせ公聴会と言われます。実績作りに貢献するようなことではまずいと議論して、一方的なものだったとしても、陳述もさせられるのであれば、やはり言っておかなくてはうそではないか。あえてやらせ公聴会ということだったけれども臨みました。結局公聴会の結果は向こうの思惑通りに進められてしまうわけだけれども、我々はそれに対して、住民がもともと望んだような公聴会にしろということを一方で言いながら参加しました。そこからが始まりです。

宝鏡寺に移された非核の火

上野の火の移転は小野寺弁護士からお話があったのですか

小野寺利孝先生が、広島の火が福岡県星野村の山本達夫さんのところで灯されていると聞いて、その火を東京でも灯そうといろいろ取り組んだ結果、東照宮の当時の宮司が快く受け止めてくれて灯していました。しかし次の世代の宮司になったらどこかへ移転してくれとなり、それでだいぶ移転先を探しましたが、どうしてもないと困り果てていたところ、小野寺先生から早川のところでどうだと言われ、それはいいことだと二つ返事でした。小野寺先生は「上野東照宮境内に『広島・長崎の火』を灯す会」をつくり、東照宮で灯し続けるために都民にアピールし、毎年、行事を行なってきました。それを福島に移すとなれば、そういう組織を作って以後ずっと運営していかなければいけない。そこで避難者訴訟の原告団長の私と市民訴訟の伊東達也さんで、組織を作って運営することを依頼され、決意して始まりました。

私も一度参加したことがありますが、3月1日にはビキニデーが行なわれています。広島も長崎も大量殺りくが目的でしたが、ビキニの核実験というのは、なお大量の殺りくを目的としたものです。第五福竜丸はその犠牲になりました。広島・長崎にビキニを加えるべきです。

不安を札束でごまかし続けた

そして平和利用という欺瞞のもとに始まった原発が地域を永遠の未来まで抹殺してしまった。安全性など非常に疑問があるのにかかわらず、それを強引に全く無視して、住民、県民、国民の原発への不安を札束でごまかし続けてきた結果、住民、国民が最も心配していた最悪の事態になりました。ですからヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言の灯と石碑にもそう書いてあるのだけれども、その灯というのは結局、火だから、それで非核の火としようとみんなの意見でそれでいいとなりました。

原発事故というのは極悪非道、国策犯罪だと思っています。これ以上の極悪はありません。そして非道です、人道に反しています。それを国策で進めている。極悪非道、国策犯罪という言葉を今後使っていこうと思っています。

伝言館の建設は前々からお考えがあったのでしょうか

原発を持ってきたの、中曽根康弘、正力松太郎、福島県では佐藤善一郎、木村守江です。彼らの名前は必ず残す。このまま行ったら大変な事故になると原子力専門の科学者が教えてくれている。住民運動以外にないといっている。そこで私たちが素朴な疑問をぶつけても、それをすっかりごまかすわけだから、よし、彼らの名前は事故が起こっても起きなくても必ず記録にとどめてやるぞという思いだったのです。それが伝言館ということになりました。

佐藤善一郎は衆議院議員から福島県知事になるのだけれども、これも裏があるのです。東京電力が原発をやると決めて55年の11月に社長室に原子力発電課というのができ、その時副社長になるのが福島県出身の木川田一隆です。彼は福島県の梁川出身なのです。彼の名前も残さなくてはいけないと思っています。アイゼンハワー、中曽根康弘、木川田一隆、正力松太郎、木村守江、彼らの写真をここに飾ろうと思っています。恨みでなくて事実ですから。心には恨みがあるけれども、それは事実です。誹謗でも中傷でもない。否定しようがないわけです。

早川篤雄さん

政府では2029年までに福島県民は帰れると豪語しているが、汚染水などの処理問題はどうなるのかと心配せずにはいられない。

そういった中での東京オリンピック強行。始まってしまえばメダル、メダルで興奮して、コロナへの不安など忘れてしまうと思ったのか。

政府は必ず起こる。いつになったら世界が平和な暮らしが迎えられるのか懸念される。

夏に願う平和な生活
メダルじゃ不安は消えない

日本の三陸に触れてみると、東日本大震災から早10年が過ぎて、汚染水の問題が起きていることは皆さんご存知だと思います。麻生大臣がトリチウムは薄めれば飲めるぐらいだと言ったら、世界のニュースで韓国政府に揶揄されました。

【江東・大工・中谷登志夫通信員】原水禁には私含めて家族も暑い広島大会へ参加、長崎大会には江東原水禁の団長を務め、合わせて7回行ってきました。

未だに世界主要国で原水爆禁止という動きは決まっていないとニュースで聞く。そして、またイスラエルの方では戦闘が起きている。いつになったら世界が平和な暮らしが迎えられるのか懸念される。

震災10年の福島に入る
箱モノがたたずむ人気ない街

7月5日、原発事故から10年が経過した福島を取材しました。浪江町を起点に車で半日回るなかで、中々進まない、進められない復興の現実が見えました。

NPO法人野馬土（のまど）に、福島第一原発20㎞ツアーのガイドを依頼しました。

この先に福島第一原発がある（大熊町）

当日はガイドの新妻慎一さんと共に3人で浪江から南下して現地を回りました。

まず向かったのは浪江町のメイン通り。解体が進んでおりその多くが更地になっていました。壊れかけた家も何もないと、復興が進んでいないこともわかりません。政府はそれを意図して、解体を進めているとのことです。

震災後に建てられた大きな立派な校舎がありました。ただ、生徒数は小中合わせて26人。強制的に避難させられた地域の、若い家族が戻らない展望のない現実がありました。

▲住宅街だったエリア（浪江町）◀大きく立派な校舎も、生徒は26人

そして帰宅困難区域の双葉町に。ここでも立派な双葉駅舎が建てられていました。壊れた家屋が映らぬよう、駅をバックに聖火リレーを行ない、偽りの復興五輪を演出したとのことでした。

大熊町を経て富岡町に。夜ノ森駅周辺では道を隔てて帰宅困難区域と避難指示解除地域が混在。解除になったといっても簡単に住もうと決心できない難しい現実が垣間見えました。

復興予算を使った箱モノ行政で建てられた豪華な施設が、人気のない土地にひっそりとたたずむ。10年経っても癒えることのない、傷の深さを感じました。